

六地蔵

八日市場を歩く

桜の美しい寺に八日市場田町の東栄寺が挙げられます。山門前の道路から満開の桜に包まれた本堂や釣鐘堂を眺める光景は、古寺の雰囲気を感じさせてくれます。

山門をくぐり境内に入ると本堂へ続く参道があり、その左側に赤の頭巾と前垂れを掛けた六地蔵が並んでいます。

六地蔵とは、6体並んで立つ地蔵菩薩のことで、寺のお堂にまつられるほか、石像と

して墓地や道端などにまつられることもあり、寺の名や地名、駅名などにも使われています。

旧八日市場市域には、現在まで13基の六地蔵が確認されています。

東栄寺の六地蔵は、像の高さが163cmほどあり最も大きな像であること、6体すべてに造立年代や目的が刻まれていることが特徴です。1732年から1761年にかけて

1体ずつ立てられ、施主や願主の名、善男善女の供養や念仏の信仰集団の念仏講あるいは六十六部の廻国を終えた僧が願主になっているなど造立目的がさまざまです。

13基の六地蔵のうち主なものを紹介します。造立年代の最も古いのは、匠瑳地区生尾・老尾神社の社殿後方の共同墓地

にある1635年から3年かけて立てられたものです。「下総国老尾村 高福寺」とあり、この地の有力者とみられる戒名から供養塔の意味合いが強く感じられます。

匠瑳・長岡区の東福寺と同・松山区の福栄寺跡墓地の像は、六十六部の廻国を終えた僧が村人の二世安楽を願い造立しました。

「六十六部」とは、日本全国六十六か国を巡りお経を納めた僧のことで、六部とも呼ばれ、廻国供養碑が市内にも残されています。

匠瑳・宮本区の共同墓地のは、1729年から29年かけ村内の男女や若衆の念仏講が「寒中念仏」の行事を終えた記念碑的な意味合いで立てたのでしよう。刻まれた文字から宮本村の寒念仏は、八日市場村見徳寺住職が導師で行われたことが知られます。

境内墓地に六地蔵がまつられる市内の寺はすべて地域の中心的な存在で、江戸時代中期に六地蔵信仰が盛んであったことを伝えています。

(市文化財審議会委員・

依知川雅一)

問 秘書課広報聴班

☎ 73・0080



東栄寺の六地蔵